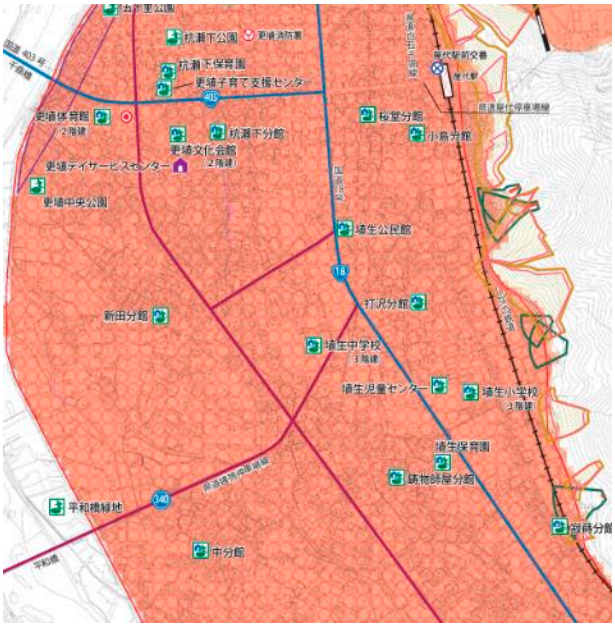
防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取組について

千曲市立埴生中学校

1　はじめに

本校は、千曲市中央部にあり、千曲川の右岸に位置する。令和元年の台風 19 号災害では、校庭をはじめ、浸水の被害を受けた。本校生徒も、小学校高学年時に被災しており、本校に避難をした経験をもつ生徒もいる。

学校および学区のほぼ全体は、令和３年４月作成の千曲市ハザードマップでは全域で氾濫流による家屋倒壊が想定されており、想定浸水深も５ｍから10ｍが予測されている。学区には霞堤（かすみてい）がある。霞堤とは、急流河川の特徴を生かした伝統的な治水工法であり、海溝部から本川の流水が逆流して堤内地に湛水し、下流に流れる洪水の流量を減少させる効果がある。千曲市の霞堤は大正７年～昭和 16 年の間に国によって整備された。台風 19 号災害時にはこの霞堤が要因となり、本校や学区内にある市庁舎一帯が冠水する被害が発生した。



2　本年度の取り組みについて

(1) 総合的な時間における防災マップづくり

ア　ねらい

・様々な災害に備え、起こりうる災害に対しての知識をつける

・自分たちが住む埴生地区の危険な場所、安全な場所を知り、災害から命を守るために自ら行動できるようにする

・学んだ知識をもとに、埴生地区の防災マップを作成し発信することで、地域に貢献する

イ　活動日　５月～11 月（フィールドワーク実施日：９/７）

ウ　参加者　３年２組 28 名

エ　活動の概要

・廣内先生（信州大学教育学部教授）の研究室の協力により、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ「フィールドオン」を利用する。

・千曲市ハザードマップを元に、埴生中校区の危険箇所を確認する。

・発見した危険箇所をタブレット端末で撮影し、フィールドオン上のマップにコメントともに掲載する。

５月	・令和元年台風 19 号災害での生徒の実体験をまとめる。 ・千曲市役所危機管理防災課の方から台風 19 号について、当時の様子や発生原因などを学ぶ。 ・避難所開設体験を実施。 ・学校を避難所と想定し、マップ上で避難者の割り振りやスペースの利用など運営方法を考える。
６～８月	・土砂災害、地震、水害が発生する原因、被害、対策をそれぞれ学習する。
９月	・フィールドワーク 実際に地区を歩き、「フィールドオン」を用いて危険なところ、安全なところを写真に撮り、コメントを残す。
10～11 月	・防災マップ作り 写真とコメントを見直し、多くの人に伝わる内容に変えていく ・11 月 18 日、月の都ふるさと千曲発表会にて全校、地域に発信。 ・校内に防災マップを掲示。

オ　生徒の様子

・台風 19 号災害で被災した生徒が学級の半分ほどいるため、当時の経験を語りながら積極的に活動できていた。

・フィールドワークでは、地域に危険が多くあると気づく生徒が多かった。

・学習を始めた当初と比べると、災害に対しての関心が高まった。

カ　アドバイザー（廣内先生）からのご助言

・登下校中に災害があったときの事が想定できるようになると良い。

→ 一人ひとりがどう行動するか、そこで防災学習の力が発揮される。

・水害を想定した避難訓練が今後必要。

・作った防災マップの活用方法を考えていく必要がある。

・災害のときに通れなくなりそうな道があることをしっかり共有する。

キ　生徒の感想より

・いろいろな人が防災マップを使ってもらえると嬉しい。

・身の回りの危険に気づくことができた。

・自分の家の周りにも、意外と危険があった。

・最初は防災マップを作っても見てくれる人が少なそうで、必要ないんじゃないかと思ったけど、実際は危険な場所、安全な場所がわかりやすく、この防災マップがあったらすぐ避難でき命を守れると思った。

・災害が起こったとき、ここにいたら危ないということがわかった。これからに生かしたい。

・作った防災マップを、保育園や小学校にも渡したい。

(2)「一月の都千曲－ふるさと学習発表会」に向けた取り組みと当日の発表について

ア　ねらい

・全校、地域の方に向け防災学習の内容を発信することで、災害や埴生地区の危険な場所、安全な場所を知らせる。

・防災意識を高め、災害発生時には、自分自身で適切に状況を判断し行動できるようにする。

イ　活動日　11 月 18 日（土）

ウ　参加者　発表者：３年２組 28 名

発表会参加者：市内小中学生 約 450 名、保護者・地域住民 約 150 名

オンラインライブ配信・オンデマンド配信

エ　活動の概要

・総合的な学習の時間に学んだ地域学習に関する発表

→本校３学年代表として、防災学習の始まりからマップ作りまでの過程、マップを作成しての考察や感想を発表した。

オ　生徒の様子

・10 月より発表準備を進め、発表を聞く人が「自分の家の近くはどこが危険なのか」「どのような危険があるのか」等、自分事として考えられるよう、内容を決めだしていた。

・自分たちの伝えたいことが、発表会に参加する地域の方や小学生にもしっかりと伝わるよう、写真や図などを用いて、効果的に伝える工夫をしていた。

・リハーサルを重ねる中で、生徒相互に意見を出し合い発表内容をブラッシュアップし、自信をもって本番の発表に臨むことができた。

カ　アドバイザー（廣内先生）からのご助言

・中学校の中で、作った防災マップをどう広めるかも大切にしてほしい。

・聞いている大人が防災マップについて考える機会にもなれば良い。

・防災マップを紹介する際、何がわかったのか、どう危険なのか具体的に伝えた方が良い。

キ　生徒の感想より

・スライドを何人かで共同で編集した。制作は大変だったけど、小学生にも伝わりやすい工夫ができた。

・発表会に参加していた小学生が、自分たちの発表を聞いて、防災マップの必要性や日頃から安全に気をつけることの大切さなど、たくさん感想を言ってくれて驚いた。

3　おわりに

「家の周りに危険な場所がたくさんあった、全然知らなかった」という生徒の率直な感想を聞き、地域の防災に対する備えや工夫、危険箇所を子どもたち自身が調査し、災害に備えていくことの大切さについて学習することの必要性をあらためて実感した。

家にいる時や登下校時など、学校外にいるときに災害が発生した場合に、どのように避難するべきか。今回の学習で、災害の種類によって逃げ方や逃げる場所が変わることを学び、どの道を通ったら良いか本気で考える生徒の姿が数多く見られた。一人ひとりの防災意識が高まった学習になったと感じている。子どもたちには、今回の学習を基に、この先も自分や家族や周りの人の命を守るために考え、行動できるようになってほしいと願っている。

（文責　教諭　伊藤　三津子）

豊科南中学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

―学校防災アドバイザー派遣・引渡し訓練・地域防災学習の実施―

安曇野市立豊科南中学校

1　はじめに

安曇野市立豊科南中学校は安曇野市の中央に位置し、西に北アルプスを仰ぎ、学区に拾ケ堰が流れ、水田に囲まれている自然豊かな学校である。豊科中学校が豊科南中学校と豊科北中学校に分かれ、本校は昭和60年に開校した。令和５年度は生徒数317名、通常学級10学級、特別支援学級３学級、こども病院の院内学級１学級を含め全14学級の中規模校である。校舎は南と北に１棟ずつであり、１階と２階にそれぞれの校舎をつなぐ渡り廊下が設置されている。北校舎には校庭側（北側）に非常階段があり、すぐに屋外に出られるような構造になっている。

学区内に山や大きな河川があるものの、職員も生徒も防災（特に水害）に対する意識が低い。防災マップの見直しにより、本校が犀川と万水川の二つの河川の浸水区域に指定されたことを意識させ、自分の身を自分で守る意識を高め、緊急時の避難行動が自発的にできる生徒を育てたい。本年度は、昨年度より計画をしていた引渡しを含む水害に関わる避難訓練を小学校と連携して実施した。来年度は、今年度の反省の元、引き続き防災教育を進めていく。

2　本年度実施した避難訓練

(1) 第１回避難訓練

ア　実施日　：４月14日（金）

イ　実施内容：避難経路の確認・非常事態への対応　※放送による

(2) 第２回避難訓練

ア　実施日　：８月31日（木）

イ　実施内容：水災害防災（水防）引渡し訓練・職員研修

○万水川の氾濫による生徒の保護者引渡しを想定した水災害防災引渡訓練

(ｱ) オクレンジャーの配信と引渡し準備

(ｲ) 体育館への避難（水平避難）

(ｳ) 保護者への引渡し

(ｴ) ３階への避難（垂直避難）

(3) 第３回避難訓練

ア　実施日　：10月31日（火）

イ　実施内容：避難経路の確認・非常事態への対応

(ｱ) 訓練の意義や火災発生時について各学級で指導

(ｲ) 火災報知器の作動
(ｳ) 避難経路の安全確認・避難指示
(ｴ) 生徒と職員の人員確認
(ｵ) 防護団活動（係活動の確認）

3 本校の避難訓練からの課題

防災マップの改正により、本校は犀川と万水川の浸水想定区域の学校となった。安曇野市作成水防タイムラインに沿った行動を考えると、「氾濫注意情報」が出た段階で保護者への引渡しを行うことになる。本校は今まで地震や火災を想定した避難訓練は行ってきたが、水害想定での避難訓練や引渡し訓練は計画していたものの、コロナ禍でやむなく中止となっていた。本年度、従来の計画を基に水害想定の引渡し訓練を行うことができた。

4 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 避難訓練事前指導

ア 実施日　　7月12日（水）　15:30～

イ 指導・助言

・保護者が引き取りに来たときの駐車場の確保と動線の確認
・垂直避難・水平避難についての違い
　垂直避難の場合、１階が浸水するとトイレが使用できない。
・引渡しを連絡するタイミング
　氾濫警戒情報で引渡しでは間に合わない。
・引渡しカードの活用

(2) 避難訓練参観・事後指導

ア 実施日　　8月31日（木）　13:35～

イ 指導・助言

・子どもたちが引き取りを待つ間、ある程度ざわざわして話し声がするのはかまわない。大切な連絡や指示が通ればよい。実際の災害の場面では子どもにストレスがかかる。引き取りを待つ間は子どもがストレスを感じないような雰囲気づくりが大切。
・教室で引き渡すパターン、校庭で引き渡すパターンなど、様々なパターンを想定して訓練しておくのがよい。
・引渡しカードに名前の記載がない人が引き取りに来た場合に、引き渡すのか引き渡さないのかを明確に組織として決めておくこと。そしてそれを事前に保護者に周知しておくこと。カードに名前の記載のない人に引渡したことにより子どもが災害や事故に巻き込まれた過去のケースでは、裁判で学校側の責任が問われている（裁判で学校側が負けている）。
・駐車場の誘導は今回くらいの人員で適切だった。駐車場の広さに合わせて必要な人数が変わる。

・実際の災害の場面では雨天が想定される。雨天時には視界が悪い。駐車場で誘導する人は反射材のついたベストを着用して自身の安全を確保すること。
・もし引渡しになった場合に学校までどのくらいの時間がかかりそうかをあらかじめ把握しておくとよい。そうすれば、長く残留する子どものおよその人数を把握して物資等の準備ができる。
・水防タイムライン（安曇野市作成）をあらかじめ保護者にも配付して、およその流れを周知しておくのがよい。
・簡易トイレの使い方については平常時には一度デモンストレーションしておきたい。
・保護者には、職場―学校―自宅の経路に浸水想定域があるかどうかを確認しておくようにアナウンスしておきたい。

5　地域防災学習

(1) 目的

生徒たちが自分たちの地区の防災対策や防災訓練を知ったり様々な奉仕活動を行ったりすることを通して、地域を守り支える大切さを知ったり地域を大切に思ったりする心を養う。

(2) 実施日　令和５年５月30日（火）　14:30～16:00

① 地域防災学習 14:30～ 15 分程度　　② 奉仕活動 15:00～16:00

(3) 実施内容

ア　地域の方々と顔を合わせることにより、どんな人がいるのかの確認、実際に物を使用して体験(地震体験車乗車、消火栓の使用方法等)する。

イ　区長さん、防災リーダーさんからお話しを伺う。

ウ　公民館の防災グッズや公園の防災施設を見学する。

6　事業の成果と今後の課題

(1) 成果

・学校の立地場所から想定される水害の危険性について職員が意識して、引渡し訓練を実施することができた。
・防災アドバイザーの助言から、生徒引渡しでの改善点や更なる工夫点について確認することができた。
・地域防災学習から、生徒自身が地域の方々から地域防災の仕組みを教わることができ、自分は地域に何ができるのかを主体的に考えることができた。

(2) 課題

・引渡し訓練は２学期に実施したが、年度当初（４月～５月）の実施を検討し、小学校と連携して計画を立案する。
・校内での引渡し順をマニュアル化し、保護者と共有する。特に、災害時の引渡しやそれに伴う駐車場の利用について理解を求めていく。
・地域と連携した防災学習や防災訓練をさらに進め、生徒の地域防災への意識を高める。

（文責　教頭　尾臺　博之）

穂高東中学校における防災意識・行動力向上に向けた防災学習の取組について
－　地域防災の主体としての自分のあり方を考える　－

安曇野市立穂高東中学校

1　はじめに

本校西側には、北アルプスが連なる。学区東側に活断層の存在が指摘されていて、安曇野市地域防災の「ゆれやすさマップ」で、震度６弱が想定されている。さらに、学区内には、北アルプスを源流とするいくつもの河川や四方に張り巡らされた大小様々な堰があるが、通学区域の大部分は浸水想定区域や土砂災害警戒区域には入っていない。しかし、近年、記録的短時間大雨情報が出されたり、ゲリラ豪雨のような予測が難しい大雨が各所で見られたりする。本学区内でも、浸水の可能性がないとは言えない。

こうした自然環境の中、19 学級（うち特別支援学級５学級）、全校生徒数 442 名、職員数 48 名で、学校教育活動が営まれている。

本校の学校教育目標や運営の理念は、次のとおりである。

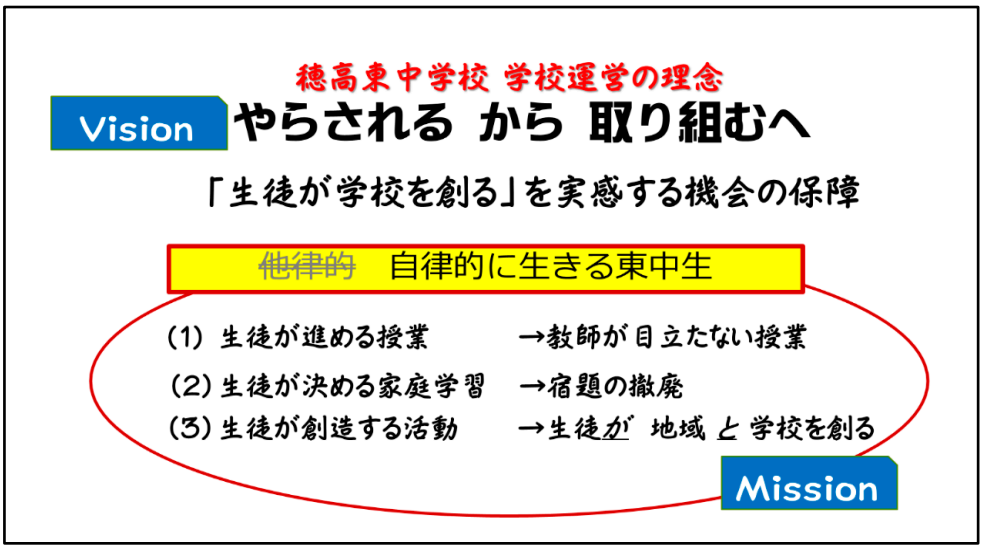


表１

学校教育目標

表２

７年前に始まった「地域と連携した防災学習」は、本校の学校教育目標や学校運営の理念の具現に向けた取組の一部として実施してきた。そのため、新型コロナウイルス感染症による３年間の中断の影響を受けずに、昨年度復活した。今回は、本年度の取組の成果と課題、今後の見直しの具体について紹介する。

2　「地域と連携した防災学習」実施までの過程

(1) 学習の最終目標は「取り組む自分になっていく」

地域と連携した防災学習は、**表１**の（3）にあたる。この学習を通して、自律的に生きる東中生として「取り組む自分になっていく」ために、**表３**にある３つの段階的目的を設けた。

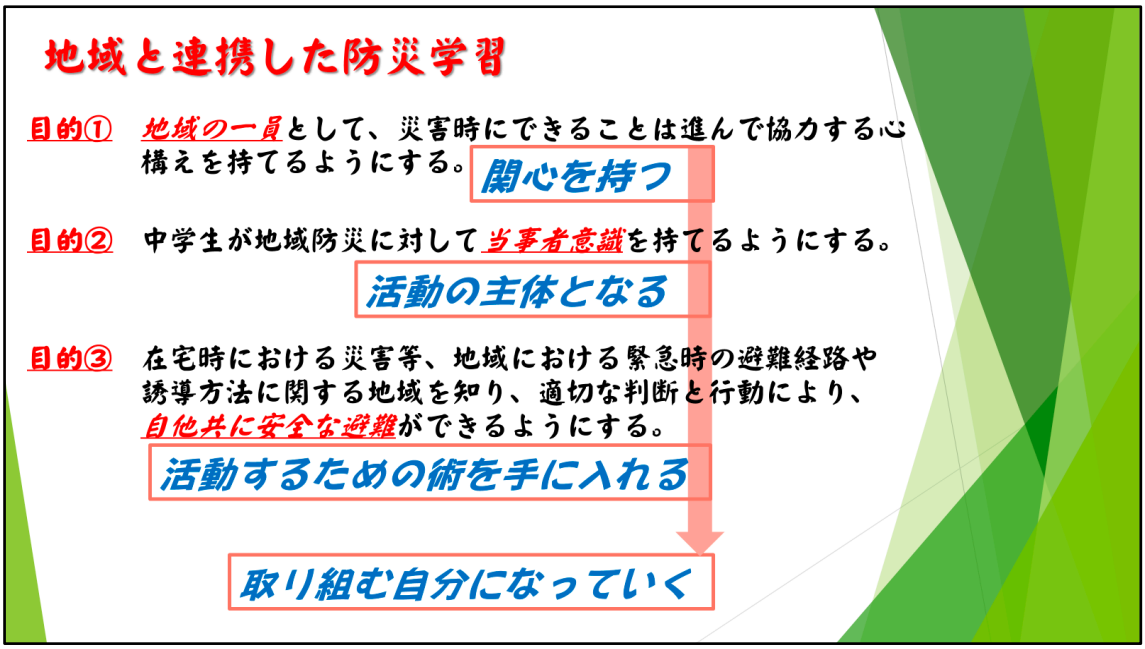


表３

(2) 地域が学びのフィールド　地域住民は先生であり学びの仲間

地域と連携した防災学習のキーマンは、学区内 12 区の区長である。区長は、地域の風土を知り、住民の営みを把握している。その上で、生徒とともに本活動の内容を検討していく。区長は各区内の関係者に協力して準備したり当日の運営をしたりしていくだろう。学校と地域が目的を共有した上で、協力要請することは本活動の充実に大きな意味を持つ。そこで、校長が穂高地域区長会（４月、７月）に出向き、次の３点から趣旨説明と協力依頼をしている。

①地域の皆様との体験的な学びを通し、地域防災に対する当事者意識をもち、地域の一員として、災害時にできることは、進んで協力しようという心構えをもつことができるようにしたい。
②在宅時における災害等、緊急時の避難経路や誘導方法に関する知識を知り、適切な判断と行動により安全に避難ができるようにしたい。
③成長過程の途上にある中学生が、地域に住む「良い大人」と出会うことを通して、その考え方や生き方に触れる機会としたい。

(3) 有識者や外部機関を巻き込む

本校の防災学習は、学校防災支援アドバイザーとして、信州大学教育学部教授の廣内大助先生から助言をいただきながら進めている。また、穂高地域区長会をはじめ、長野県教育委員会保健厚生課、安曇野市危機管理課等の協力を得て実施している。

さらに、穂高地域消防団には、当日、現地に赴いて地域の子どもたちとともに活動していただくよう、各区長が依頼した。

(4) 生徒により当事者意識を持たせる

主体的に活動に取り組むには、当事者意識は欠かせない。今までは、区長が居住地の抱える防災上の課題を基に実施案を作成し、事前打合会で各区代表生徒に伝えてき

た。本年度は、昨年度までの実施内容を参考にしながら、区長と代表生徒が一緒に立案し、実施前の地区生徒会で各地区生徒会長が伝えていくことにした。

以上、(2)～(4)は**表４**のようになる。

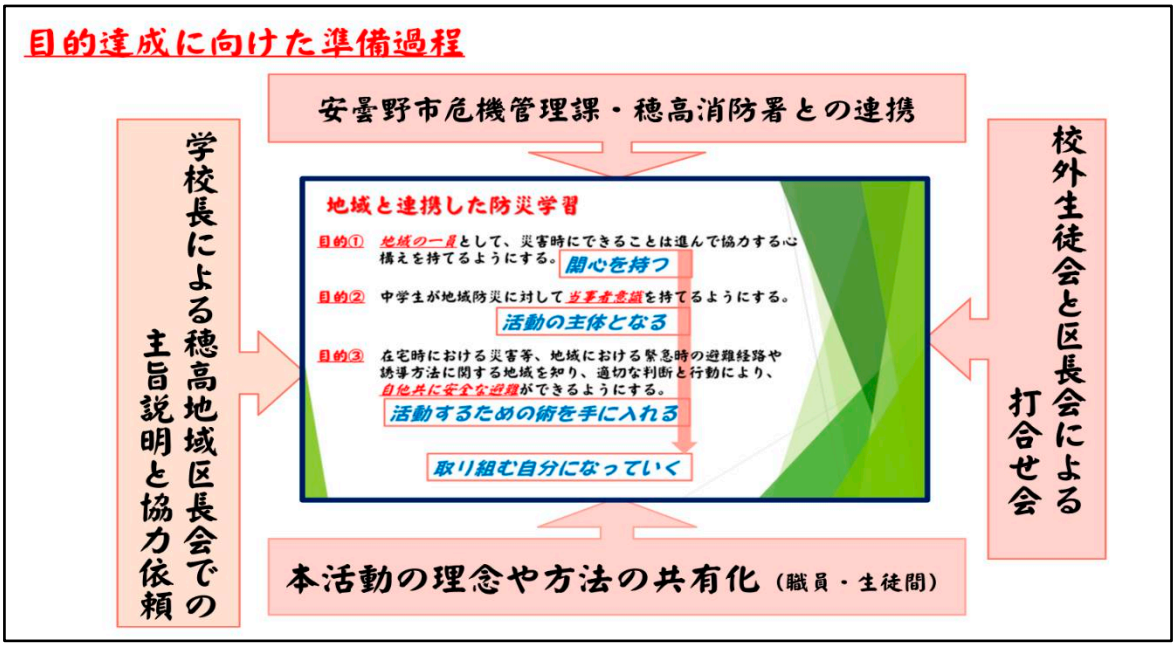


表４

３　「地域と連携した防災学習」の実際

矢原	土のうづくり 大雨や地震時の対処	本郷上下	消火器訓練　防災講話 防災ホイッスル配布
白金	避難所、防災倉庫の確認 初期消火訓練	西原・田中・上原	テント設営　防災講話 防災ホイッスル配布
穂高団地	専門家からの防災講話	柏原	消火器取扱い　搬送訓練 バケツリレー消火訓練
等々力区	ハザードマップ確認 消火器訓練　非常食作り	柏矢町	消火器訓練　発電機操作訓練 簡易担架での救助訓練
等々力町区	ヒヤリハットマップづくり 災害時のＡtoＺ	久保田	消火器訓練　防災倉庫見学 非常食試食
穂高町区	非常用担架の作成 防災倉庫や放水手順確認	狐島	災害体験講話　非常食体験 避難路危険箇所報告訓練

【実施後の生徒の感想】

○長野県内で、震度７の地震が起きる確率が全国的にみても高いことを知って、驚きだった。揺れ方も想像できない。海に近くないし、山がすごく近くにあるわけでもないので、何となく安全と思っていたので、もっと災害を身近に感じるべきだな、と思った。
○地震や台風で避難が必要となった時、スムーズに避難することとともに、家族とは、どこに逃げて待ち合わせをするか決めておきたい。
○地区の組織表を見て、地区には区分があり、それぞれの人に役割があることを知った。中学生やこれから高校生になる自分の役割を知ったので、その時は自分で判断して動くことが、自分や周りの人の命を救うことにつながるのだと思った。
○近所に高齢者がいる。災害時に助けるといっても危険がともなうから、何ができるか知らなかった。でも、「火事だー！」「逃げろ！」という声が人の命を救えるのであれば、行動を起こしたいと思った。

【学校防災支援アドバイザー 信州大学教育学部教授 廣内大助先生からのご指導】

地域とのつながりが希薄な年ごろの中学生にとって、自分が住んでいる地域を知る機会になったことが大きい。有事の際に有益になる。各地区の防災学習の内容を、災害の時系列で考えると、どの部分を行って、どの部分を行っていないかが分かってより深まる。今までは自助、これからは共助。当事者意識をどう持つか、何が自分たちにできるのかしっかり考えさせる機会にしていきたい。

この活動を継続的かつ計画的に行っていることは東中の良さである。各年度の活動後、成果と課題を明らかにして、より良い学習の機会となっていくよう、内容や方法を検討していきたい。

4　「地域と連携した防災学習」をよりよい学びの機会としていくために

(1) 当事者意識を高める工夫

ア　「地域と連携した防災学習」を特別な教育活動としない

本校は、「自ら学ぶ 共に学ぶ 人から学ぶ」を学校目標とし、「やらされるから 取り組むへ」を合い言葉に教育活動が営まれている。特に「しゃくなげタイム」と称して実施される総合的な学習の時間は、地域を３年間の学びのフィールドにして、穂高のひと・もの・ことに触れ、１学年は「穂高を知る」２学年は「穂高に生きる」３学年は「穂高に貢献する」ことを学んでいく。

同様に、地域と連携した防災学習も本校の学校教育目標具現のための活動の一つ

である。今後も、状況に応じた自己判断力や共助意識の涵養や、より良い取組を多くの人から学び、それを生かそうとする学習機会としていきたい。

イ　学校や大人がすべてをお膳立てしない

本活動は、開始当初からコロナ禍で中断する４年前まで、各区長が立案し、事前打合会で内容を地区生徒会代表生徒に説明してきた。代表生徒は地区生徒会で伝達し、当日を迎えていた。これでは、生徒にとってやらされる活動である。

そこで、前述したとおり、本年度からは、各地域の状況に基づいて区長が作成した原案を基に、災害を防災、減災、災害時の視点から中学生が地域にどのように関われるかを地域の大人と中学生が検討し、防災学習当日の内容を決めていった。例年は、７月中旬実施の事前打合会後、速やかに学校に提出された実施計画が、本年度は、全区の計画が出そろったのが８月下旬であった。これは、中学生の考えを実施計画に反映した各区の思いの表れである。新たな形式の打合会が、生徒と区長の双方に有益な時間となり、活動の推進役である各地区生徒会長と区長の主体性を高めていった。

(2) 活動を形骸化させないための工夫

本学習は、学校が活動の骨子を作成後、有識者や外部機関と連携して実施している。活動に様々な立場の人が関わることは、活動の幅が広がるばかりでなく、振り返りの際に各立場の視点から考察し、次回に向けた課題を明らかにすることができる。以下は、区長会、市危機管理課、地域コーディネーター、市教育委員会、県保健厚生課との振り返りで出された指摘である。

〇地域の特色が出ていてよかった。区長が熱心に生徒のために、勉強・調査・準備をしていたことに、地域で子どもを育てるという思いが伝わってきた。区長たちの思いを生徒に伝えていきたい。

〇時間が短く、区長さんは一生懸命話をしたい中、アクティビティーな活動が少なくなっていた。中学生はもう助ける側に回ることもある。やや真剣みが足りない感じがした。

〇地域のことを「知る」「貢献する」ということより、ひたすら地域の方にお世話になる感じだったが、「地域とつながりを持てる」という前段階には近づけたのではないだろうか。

〇９月１日前後の日曜日に、各地区で行われる地区の防災訓練に中学生が参加することが最も良く、自分の住む地区の防災訓練を知り、地域の方と一緒に訓練するようにしていったらどうか。

５　おわりに

本学習は、いざという時に地域のために力になろうとする気持ちを高めるのと同時に、命を守る担い手として行動できる術を身につける機会になっている。

また、地域と関わる機会が多いとはいえない中学生にとって、地域や中学生のことを大事に考えたり、住民として責任を果たそうとしたりしている大人と出会うことは、自分自身のよりよいあり方を考える学習となっている。そして、地域住民の一員であることを実感していく。そんな中学生と一緒に活動することで、区長さんはじめ地域全体がそこに住む若者と出会い、元気になっていく。「地域と連携した防災学習」は、両者の出会いの場であり、つながりを深める機会である。この出会いとつながりこそが、有事の際の行動に生かされていくのではないだろうか。

（文責　教頭 保科　潔）

安曇野市立三郷中学校における防災管理、防災教育に向けた取組について

－　小中合同引渡し訓練と負傷者を想定した避難訓練　－

安曇野市立三郷中学校

1　はじめに

本校は、安曇野市の南部、松本市と隣接する場所に位置する、全校生徒 490 名の中学校である。西には、北アルプスの山々がそびえ、南には梓川、東には犀川などの大きな河川に近い土地である。学区は、梓川及び黒沢川の扇状地上の緩やかな傾斜地に広がっている。本校は、これらの河川により形成された扇状地堆積物の上に立地している。

このような土地に立地する本校の近辺には糸魚川－静岡構造線が存在し、今後 30 年以内に震度６弱以上の地震が発生する可能性が高いと言われている。このため地震発生時には、安全かつ迅速な対応が求められる。

そこで本校は、令和元年度から「学校安全総合支援事業」に加わり、学校アドバイザーとして信州大学教育学部教授　廣内大助先生を講師にお迎えし、助言を頂きながら避難訓練を実施するなどの取組を行ってきて５年目を迎えている。

2　三郷中学校防災訓練３年計画

昨年度、以下のように３年間のサイクルを作成した。今年度は、初めて小中合同の引渡し訓練を行う年となった。

防災訓練３年計画

安曇野市立三郷中学校

	４月	５月	９月初旬	１０月末
１年目 R4,7,10,13	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 出火場所：調理室 登校時指導		シェイクアウト訓練(0.5h)	避難訓練(地震・火災)(1h) 授業中(告知なし) 放送機器故障 出火場所：第１理科室
２年目 R5,8,11,14	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 防火扉閉め避難 出火場所：第１美術室	避難訓練（隔年R5,7,9） シェイクアウト訓練 引き渡し訓練 小中合同	シェイクアウト訓練(0.5h)	避難訓練(地震・火災)(1h) 休み時間(告知なし) 怪我・行方不明あり 出火場所：技術室
３年目 R6,9,12,15	避難訓練(火災)(1h) 授業中(告知あり) 出火場所：被服室 登校時指導		シェイクアウト訓練(0.5h) 避難所生活学習	避難訓練(水害)(1h) 校外避難場所へ避難

3　三郷小中合同引渡し訓練

(1) 小中での連携と対応

令和５年５月 19 日（金）に三郷小学校と三郷中学校が合同で引渡し訓練を実施した。三郷小学校では毎年行っている訓練だったため、三郷中学校は小学校と同じ日に年間計画に位置づけ、時間を調整した上で、引渡しを行った。もっとも懸念されたのは、駐車場の混雑および周辺道路の渋滞だった。小中学校でそれぞれ下表のように対応した。

	三郷小学校	三郷中学校
引渡しの判断（オクレンジャー発出）	13:00	13:00
引渡し時間	15:00～16:30	15:00～16:15
小中両方にお子さんがいる場合	小学校が後	中学校が先
兄弟姉妹がいる場合の引渡し方	上の学年で一緒に引渡し	それぞれの学年で引渡し

(2) 訓練の経過

時間	全体の動き	職員の動き
13：00	○引渡しの判断 ・学校長、教頭、教務協議の結果、生徒の引渡しを決断	＜本部・外部対応＞ ・本部設置（講堂） ・引渡しカードを職員室より持参（教務主任または教頭） ・事務室で電話対応（事務） ・保護者へオクレンジャーを発出（教頭）
	オクレンジャー発出 「訓練、訓練。本日５月 19 日 12：50、長野気象台から暴風警報が発表され、只今風雨がかなり強まってきております。そこで、三郷中学校、三郷小学校では、安全に下校するために、15:00 から生徒の引渡しを行います。引渡し時間の目安は以下の通りです。 15：00～15：20　小学校に兄弟がいる家庭。15：20～15：40　各クラス名簿番号 1～20 番。 15：40～16：15　各クラス名簿番号 21 番以降。引渡し時間を参考に来校いただきますようお願いします。」	
14：25	○放送指示（教頭） 「訓練、訓練。台風が接近し、危険なため、お家の方に迎えに来ていただく「引渡し」を行います。帰りの会を行い、次の指示まで各教室に待機してください。※繰り返す」	＜学級担任＞ ・学級名簿、筆記用具、携帯電話を持参する ・職員室へ引渡しカードを取りに行く ・引渡しの流れ・心構えを生徒に説明する ＜保護者誘導係＞（各学年副担任） ・講堂と社体に集合し、分担を確認する ・引渡し時刻前に到着した保護者の整理、以後保護者の整理 ＜救護係＞（講堂：養護教諭、体育館：副担任） ・救護所設置（ステージ前に設置） ＜電話対応係＞（事務職員、体育館：支援員、講堂：副担任） ・電話による連絡事項伝達
14：45	○放送指示（教頭） 「（講堂と体育館への避難指示）」	○各クラス、移動した後、担任が人員点呼を行う。
15：00	○放送指示（教頭） 「これより引渡しを開始します。生徒の皆さんは、そのまま静かに待ちなさい。」	＜学級担任＞ ・生徒本人に引き取りに来た人を確認のうえ、引渡し、学級名簿にチェックしていく。「引き取りに来た人」と「引渡した時刻」を記入。例「生徒氏名　父　16:00」 ＜保護者誘導係＞ ・各クラスの保護者控え場所に保護者に並んでいただく。

16：15	○放送指示（教頭） 「各学年は、引渡し状況を講堂の本部に報告してください。」	○事前に迎えが来ないと連絡のあった生徒は、下校させる ＜１学年：副担任、２学年：副担任、３学年：副担任、特支：担任＞ ・「迎えが来る予定で、まだ引渡していない生徒の人数」を各学年担当に報告する ・学年担当は本部(教頭)に現状報告→学校長
16：15	○引き取りに来ていない家庭に電話をかける	各学年副担任
16：30	○残った生徒をすべて下校させる	＜本部＞ ・終了の指示　　・校内体制を解く

(3) 考察

訓練自体は、スムーズに進み、大きな問題はなく生徒を家人に引渡しすることができた。心配された車の混雑は大きな渋滞とはならずに済んだ。その中でも、いくつかの点が課題となった。①生徒を家人に引き渡すときの確認方法が統一できていなかったため、小学校の確認方法に合わせていくべき。②中学生を引き渡さないといけない場合は、どのような場合なのか検討が必要。（後日、廣内先生にご指導いただき、中学生を引渡しする判断は市教育委員会の指示に従って行われることになるだろう、ということだった。）以上の課題を２年後の次回訓練に生かしていきたい。

4　学校防災アドバイザーの関わり

(1) 学校防災アドバイザー廣内大助先生による学校訪問時のご指導　令和５年９月８日（金）実施

「第２回避難訓練計画」について

・行方不明者を出さないように訓練をする必要がある。避難する際に、生徒が残っていないかどうか、確認しながら避難をすべき。

・保健室で動けない生徒がいたら、どのように避難するのかを、確認しておきたい。

・担当者を決めておいても、実際の災害の時には破綻する。いかに臨機応変に動けるかが大切。

・避難の際、教室を点検した場合には、黒板に○をつけられるが、トイレなどは○をつける場所を決めておくとよい。

・「この教室では～～する」というように、生徒の具体的な対応の仕方が掲示されているとよい。

・シェイクアウト訓練を行う場合、特別教室での対応の仕方を確認しておきたい。

(2) 第２回避難訓練実施後における廣内先生のご指導　令和５年 10 月 23 日（月）実施

・欠席・遅刻・早退の生徒について記載されているホワイトボード（職員室に置かれている）の内容は正確なのか、確認する必要がある。運用の仕方を再確認したい。

・緊急地震速報が流れたときに、ガラスの近くにいた生徒、外の渡り廊下にいた生徒、反応しない生徒がいたので、指導が必要。渡り廊下は、地震の

際に壊れやすく、非常に危険な場所である。

・車イスの生徒は机にもぐることはできないため、何かにつかまるか、防災頭巾を用意するとよいだろう。

・現場で消火するという活動が訓練の中に位置づけられるべき。

・最後は臨機応変な対応が肝要。大きな音を出す、声を出す、笛を鳴らす、メガフォンを置いておく、などの対応や備えを検討してみてはどうか。

5　事業の成果及び今後の課題

(1) 引渡し訓練から

三郷中学校として初めての引渡し訓練となった。通知の作成から手探りであったため、すでに毎年実施してきている三郷小学校からデータをいただき、参考にさせていただいた。小中で合わせる部分と、それぞれで検討が必要な部分があり、小学校との調整にも時間をかけた。小中が連携しなければならないため、今後も継続して小学校と連絡・調整をしていきたい。そして、廣内先生からのご指導がなかったら、おそらく引渡し訓練を実施しようと考えなかっただろう。やってみて課題が見つかったこと自体が成果だったと考える。２年後の訓練に生かしていきたい。

(2) 行方不明者が出ない避難のために

避難する際に、行方不明者が出ないように生徒を避難させ、職員が施設を点検しながら避難することが重要だとわかった。点検した部屋やトイレなどに、済んだことが分かるように「〇」をつけることを廣内先生からご指導いただき、係の提案で黒板のないトイレなどに紙を貼って訓練を実施した。実際に災害が起きた時のために、紙を貼っておくべきかどうかという検討をするなど、職員の防災意識を向上させることにもつながった。

(3) 防災訓練は職員の対応力を高めるために

初めて実施した引渡し訓練と負傷者を想定した訓練だった。職員の対応力や意識を高めることができた。筆者が若い頃、先輩の先生から「避難訓練は 100 点でなければならない」と教えられ、生徒にもそのように伝えてきた。しかし、廣内先生からの助言から、やってみて課題を出した方が意味がある、ということを感じることができた。確かに日々の校務に追われ、できることなら避難訓練は毎年同じように実施し、「完璧でした」で終わった方が生徒も職員も気持ちが良いのだが、いざという時に対応できる力は職員にも生徒にも付いていないように思う。廣内先生からいただいた「先生方の対応力を高めることが大切だ」という言葉が強く印象に残った。

(4) 次年度に向けて

来年度は、「３年計画」にあるように、水害避難訓練を実施したいと考えている。

（文責　教諭　三村　徹）

学校防災アドバイザー派遣・活用事業の取組について

町内保小中連携しての引渡し訓練

飯綱町立飯綱中学校

1　はじめに

飯縄山の麓、長野市の北東に位置する本校は50余年前に牟礼村三水村の二つの村の組合立の学校としてスタートし、平成の町村合併による飯綱町の成立により、一町一校の中学校として存続している。生徒たちはふるさと飯綱の豊かな自然・文化・伝統を自分から意識することはないが、多くのところで感じている。「飯綱山こそ　われらが希望」と結ぶ校歌の一節はそれらを感じる心のありようを表すと同時に、学校教育目標である「自主」・「友愛」・「剛健」の基底をなしており、日々の学校生活を支えている。

○　自主　主体的、創造的に生活し、学ぶ楽しさを味わうことができる生徒

○　友愛　みんなの幸福を願い、豊かな情操をもつ生徒

○　剛健　明るくたくましい心身を備え、気力体力が充実した生徒

2　飯綱町保小中合同児童生徒引渡し訓練実施計画

引渡し訓練は令和２年度より始まり、今年度で４回目の訓練である。今年度は昨年度に引き続き町内にある、飯綱中学校、保育園３園（さみずっ子保育園、りんごっ子保育園、南部保育園）と小学校２校（牟礼小学校、三水小学校）と保・小・中が連携しての引渡し訓練を実施した。

≪目的≫

地震、洪水、凶悪犯の出没などの有事の際に児童・生徒を安全に保護者の方に引き渡すために、町内６小中学校保育園が連携して訓練を行う。

≪実施概要≫

(1) 日時　　９月１日（金）15:20～16:00

(2) 想定　　地震

(3) 事前指導　　地震、火事、凶悪犯や熊の出没などの有事の際に、児童・生徒を安全に保護者に引き渡すための大切な訓練であることを事前に周知する。

(4) 推進日程　　８月 19 日　○職員会等で検討

８月 22 日　○家庭周知文書配布（飯綱中バージョン）

○「生徒引渡し確認書」の配布

８月 26 日　○「生徒引渡し確認書」の回収

８月 30 日、31 日　飯綱町防災行政無線放送で告知
（飯綱中バージョン）

(5) 当日の動き

①情報配信システムスマート配信による情報配信（14:20）

②生徒は帰り支度をして、教室で待機する。

③引渡し開始（15:20～を目安に）

※保育園、小中学校で兄弟姉妹関係がある場合は、中学校→小学校→保育園の順で引き取りをお願いする。

≪引渡しの方法≫

①引受者に、生徒氏名、生徒との続柄、ご本人氏名を名乗ってもらう。
例）担任：「どなたですか」　引受者：「(飯綱月子）の（母）です」

②「引渡し確認書」と照合
※引受者が「引渡し確認書」に記載されてない方の場合は氏名、住所、電話番号、続柄等を確認

③該当生徒による照合
例）担任：「こちらの方は誰ですか」 生徒：「私のお母さんです」

④身元が確認できたら、名簿にチェックを入れ、引き渡す。
※兄弟関係がある場合には、次のクラスに回ってもらう。

３　事業の成果及び今後の課題

(1) 成果

・動線の改善: 学年ごとに色を示した矢印を掲示し、動線を柔軟に変更できた。これにより、引渡しがスムーズに行われた。

・手続きの簡素化: 家庭保存用の引渡し確認書を削減し、サインや身分証明書の提示も削減。結果として、引渡しが前年度よりもスムーズに行われた。

(2) 課題

・身元確認の不安: 身分証明書の提示を削減したことで、引渡し相手が本当に保護者であるかの不安が生じた。この点については、一部の意見で身分証明書の提示があってもよいのではという意見がでた。

・人員割り当ての問題: 動線の改善によって人員が削減できたが、余った人員の役割が明確でなかった。今回は主に駐車場係に人員を割いたが、本来であれば避難所の設営など他の重要な役割にも人員を割くべきである。来年度は本番を想定して、それぞれの人員に明確な役割を持たせる計画が必要。

・引渡し確認書の配布時期：これまで引渡し確認書の配布は夏休み後に行っていたが、４月当初に配布し、確認を行った方が良いので来年度はそのようにしたい。

・15:20から引渡し時間になっていたが、引渡しの準備ができていたら時間より前でも引渡しを進めていく。（中→小→保の順で引渡しを行うためできるだけ早く引渡しを進めたい。）

・家庭保存用の引渡し確認書は無くてもよいか。引渡しも学校保存用の引渡し確認書に名前が書いていない保護者のみ身分確認する程度にしてスムーズに引渡しを行いたい。
・校内の案内については壁に矢印などの掲示を行うのではなく引渡し場所の変更などができるようパイプ椅子などに学年別の色の矢印を掲示することで動線が変更できる形にしたい。

計画通りに進めることや、丁寧に引渡し確認を行うことも大切であるが、今回いただいたアドバイスから、次年度はより現実的な形に変更し臨機応援に対応することも考えていきたい。

（文責　安全指導係　山嵜　太一）

学校安全総合支援事業の取組について

―村防災マップと村内フィールドワークの実施を通した
安全な避難場所について―

白馬村立白馬南小学校

1　はじめに

白馬村は長野県の北部に位置する人口約 9,000 名の村である。本校は、児童数 104 名、職員数 17 名の山間小規模校である。保護者の多くは本村の基幹産業であるスキー場や宿泊施設で働いている。また、本村は、神城断層の上に立地しており、平成 26 年 11 月 22 日には、県北部を震源にした最大震度６弱を観測した地震（神城断層地震）の被害を受けている。豪雪地帯であるために家屋が比較的頑丈な造りであったにもかかわらず、特に堀ノ内・三日市場地区の被害は甚大で、全壊または半壊した家屋が多く見られた。幸いにして、命を落とした方はおらず、「白馬の奇跡」と言われている。現在在籍中の多くが就学前や生まれる以前の出来事であり、震災時の事を記憶している児童は少なくなってきている。

2　白馬村立白馬南小学校の防災体制について（概要）

本校は、年間３回の避難訓練及び、聞き取り訓練、引渡し訓練をそれぞれ１回ずつ実施している。また、災害時には学校安全管理マニュアルに従って、教職員が防災組織を使った対応ができるように体制を整えている。さらに、安全の日を月１回設けて、校内の各自の管理場所を点検している。

(1)年間の避難訓練計画

・聞き取り訓練　　４月　７日（金）

【目的】災害・火災時における緊急放送の情報を児童が正確に聞き取るための訓練

・第１回避難訓練　４月 17 日（月）

【目的】学校管理下における児童の安全確保及び、教室からの避難方法・避難経路の確認

・児童引渡し訓練　５月　２日（火）

【目的】自然災害や人的災害発生時における児童の安全確保及び、保護者への確実な引渡しのための保護者、職員の訓練

・第２回避難訓練　９月　７日（木）（事前予告なし）

【目的】地震発生に伴う児童及び職員の安全確保及び、教室からの避難方法・避難経路の確認、二次避難として、学校から指定避難場所への避難方法・避難経路の確認

・第３回避難訓練　12 月 21 日（木）（11 月 22 日が神城断層地震発生日）
【目的】地震発生に伴う火災発生時の児童及び、職員の安全確保と冬季の避難経路の確認

(2) 避難訓練の工夫

ア　二次避難を想定した避難訓練

本校は、土砂災害警戒区域に立地しており、降雨や地震など、複数の要素が重なった場合に校舎への被害が出ることが危惧される。実際に災害が発生した場合に、校内で避難したのちに二次避難をしなければならない状況も考えられるため、昨年度作成した避難確保計画に基づき、貞麟寺・飯田公民館への避難を想定した訓練を計画している。今年度２回目の訓練では、貞麟寺へ二次避難を行った。集中して職員や児童たちは訓練にあたることができた。有事の際の地域との連携についても確認することができた。この避難訓練の振り返りを行う中で、学校同様に裏手に山を抱える貞麟寺へ避難することが果たしてベストなのかどうかという疑問が職員や６年生の児童の中から上がった。このことが、本年度の６年生防災学習のきっかけとなった。

イ　避難経路の設定

本村は、冬になると積雪や屋根から大量の落雪があるため夏季と同様の避難経路を使えなくなる。そこで、第３回目の避難訓練は学校周辺が雪で塞がっている状態で火災が発生したという設定で訓練を実施した。出火場所を避け、より迅速に校舎外へ出て避難しなければならない場合に、北校舎の５、６年生は学校敷地の外周を廻って待機場所へ避難することになる。落ち着いて放送を聴くこと、冷静かつ瞬時に判断することが必要であり、職員や生徒にとって、緊張感が必然的に生じる訓練となっている。

ウ　避難訓練の年間計画

今年度は３回の避難訓練及び、聞き取り訓練、引渡し訓練をそれぞれ１回ずつ計画し実施しているが、１回目の避難訓練は４月当初に計画し、１年生も避難経路の確認が早い時期にできるように配慮している。また、それに先立ち、前日には放送のみの聞き取り訓練を行い、事前にイメージを作りやすい場面を設定することで、配慮を要する児童も落ち着いた行動をとることができる一助になっているのではないかと考えられる。引渡し訓練についても、新学期の生活に慣れ始めた５月上旬に設定し、緊急時に安全で迅速な引渡しができるように計画している。２回目の避難訓練は地震と土砂災害や浸水被害を想定して行った。３回目の避難訓練については冬季の地震と火災を想定し、それぞれ二次避難への対応、積雪がある時期の避難経路確認を目的と

して、児童や職員が実感をもって訓練にあたれるようにしたい。

3　学校防災アドバイザーの関わり

今年度、防災アドバイザーとして信州大学の榊原保志特任教授を中心にご指導をいただいた。具体的には、８月初旬の訪問時に、今年度の学校の防災計画や防災学習についてご指導いただいた。11 月初旬から中旬頃に、白馬村内の実地調査をしながら、学校防災についての学習を行う方向となった。当初は、地震に対しての防災学習という位置付けであったが、近年全国各地で豪雨による災害が多発する現状や本校が山際に接している学校でもあり、第２回目の避難訓練の反省から、「避難場所が山に近い場所では危険なのでは…」という疑問が生まれた結果、大雨等で土砂災害の危険性が高まった際にどこに避難することが本校にとって良いのかということに軸を置いて防災授業を６学年で行った。その授業の際に、信大榊原先生、白馬村の震災跡地を案内する「アーカイブサポーター」の皆さんに、フィールドワークに同行いただいたり、助言いただいたりした。

フィールドワークを行うことで、防災マップからは想像できない生の様子を知ると共に、避難場所に指定されている箇所には理由があることも体験的に学習することができた。

4　まとめ（事後の成果及び今後の課題）

今年度も避難訓練に関しては、実施時期や計画について検討・工夫し実施した。近年の自然災害において「想定外の事態」に見舞われ、甚大な被害が出でしまうケースもあるが、平時より想像力を働かせ、最低限、実際に被害が予想される部分については対応を準備しておく必要がある。今後も地域の組織や自治体との協働についても今後更に連絡を取り合いながら備えていかなければならないと考える。

また、信州大学榊原特任教授より、防災マップだけでなく、実際に目で見て考え行動する中でわかる防災があることをご助言いただいた。災害を完全に防ぐことは難しいが、フィールドワークを通して得た知見を共有し、いざという時にどうすれば良いのか適切に対応していきたい。

２年間の授業の取組により、本校の６年生は、自分が助かるにはどうすれば良いのか真剣に、そして深く考えるようになった。それだけでなく、自分たちが学校の中心的な支柱として、どうしていくことが学校のみんなを助けることにつながるのかというリーダーシップや他人軸の考え方もできるようになった。自分軸から他人軸（相手軸）への変容である。このことも本事業における大きな成果の一つだと思われる。

（文責　教頭　川尻　年輝）

学校安全総合支援事業の取組について

白馬村立白馬北小学校

1　はじめに

本校は、北アルプスの麓にあり、冬はスキー、夏は登山の観光客が訪れ、避暑地として知られる白馬村北城地区にある。雄大な白馬三山と姫川の清らかな流れに囲まれた自然豊かな環境に存続する創立 150 周年の学校である。

平成 26 年 11 月 22 日に発生した神城断層地震では、村の北部地域（塩島、大出など）で、土地の隆起や撓曲（とうきょく）が生じたこともあり、有事の際には身の安全について考えなければならない地域である。

2　白馬村立白馬北小学校の防災体制について（概要）

「不慮の災害発生時における児童の安全保持と敏速な対処」や「自分や他人の生命を尊重し、日常生活を安全に保つために必要な事柄を理解させ、進んで決まりを守り、安全に行動できる態度や能力を養う」ことをねらいの一つとして防災体制を整えている。４月の年度当初には避難経路の確認と、担任による避難方法の指導を行い、地震や火災を想定した避難訓練を年３回実施している。

(1) 今年度の防災にかかわる計画・実践

①避難訓練

ア　緊急時引渡し訓練　５月２日（火）

震度５弱以上の大地震や自然災害、不審者出没等の事件・事故の発生に際して、児童の安全を確保するために学校に待機させ、保護者に引き渡す想定での訓練。

イ　避難訓練　　９月１日（金）

緊急地震速報が出た際に自ら命を守るためにどうすればよいか考え、正しい避難の行動を身につける。「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」 安全な場所を理解・判断し、地震発生時における事故の防止を図る。おさない・はしらない・しゃべらない・もどらないの「おはしも」の約束に気をつけることの意義を確認し、防災意識を高める。

ウ　休み時間避難訓練　10 月 20 日（金）

児童に訓練実施の日時を知らせずに行い、担任のいない状況下での火災時に、自らの避難の仕方を考え、避難できる力を養う。また、逃げ遅れた児童が発生したことを想定し、避難誘導する訓練も行う。

②安全点検（毎月１回）

③危機管理マニュアルの修正

安全防災管理面については、今年より行っている本事業の取組により避難訓練などの防災体制の見直しを図ってきている。10 月の休み時間避難訓練では、逃げ遅れた児童を想定した訓練に加えて、実際に集合場所に避難できなかった児童を発見するまで訓練を続けることで、防災体制のさらなる見直しにつながった。

④防災教育の推進

ア　家庭と連携した引渡し訓練を行ったり、年度当初に保護者と連絡の優先順位を確認したりするなどして、学校の防災の方針を保護者との間で共有を図った。

イ　防災学習は、理科の授業時間に、学校防災アドバイザーや姫川砂防事務所、そして神城断層地震を語り継ぐアーカイブサポーターの皆さんを講師に迎えて学習を行った。

【５年　理科「流れる水の働き」10 月 17 日】

〇講師　　姫川砂防事務所

〇学習内容　　５年理科「流れる水の働き」

流れる水の働きについて追究する中で、流れる水の働きと土地の変化との関係（雨の降り方によって、流れる水の速さや量は変わり、増水により土地の様子が大きく変化する場合があること）について学び、災害や防災についての基本的な事項が理解できた。

また、小谷村・白馬村の土砂災害対策を行っている姫川砂防事務所の皆さんを講師に迎えて、ビデオや模型を使った学習を行ったことは、子どもたちが防災に役立つ土砂災害の基礎と知識等を学び、防災に対する意識を高めることにつながった。

【６年　防災の学習　令和５年 11 月 22 日】

〇講師　　アーカイブサポーターの皆さん

神城断層地震について学校の被災状況等をさらに知ることができ、映像や対話を通して「自助」「公助」「共助」について考えを深めることができた。

３　学校防災アドバイザーの関わり

本校は、信州大学廣内大助先生にご指導をいただいている。今年度は、理科の授業時間に、次のような取り組みを行った。

(1) 防災学習

６年　地層の学習　令和５年９月 26 日

〇講師　信州大学教育学部　廣内大助 先生

アーカイブサポーター冨山さん

〇学習内容

６年理科「大地のつくりと変化」の単元

大出、塩島、蕨平地区のフィールドワークにて、地震断層によって東山エリアが成り立っていること、扇状地の末端に姫川が位置することなどについて取り上げ、白馬北小学校周辺がダイナミックな地殻変動や流水のはたらきによって形成されていることに気づくことができた。

そして、児童は白馬村文化祭にて、フィールドワークからわかったことをまとめて、学びを展示発表した。

4　事業の成果及び今後の課題

(1) 成果として、自然科学の知識を有する理科担当の教員が、理科の学習と関連させて、専門的な知識を有する講師を迎えて防災学習を指導したことで、自然災害の発生のメカニズムや身近な地域の自然環境について詳しく学び、災害や防災についての基本的な事項を理解することができた。

(2) 課題としては、防災学習に関する発信までを含めて理科の学習指導時数の中で、高学年専科教員が指導することの難しさがあった。よって、今後、安全学習としての指導内容や指導時数の検討および、理科、生活科、社会科、総合的な学習の時間等とも関連させた安全学習の展開について考えたい。

5　まとめ

令和５年 12 月 16 日、白馬村北城みそら野地区で、山の斜面から土砂と水が流れ下り、土砂が下流の水路をふさぎ、あふれた水や土砂が地区に流れ込む土砂災害が発生した。自然災害で思わぬ事態に見舞われる恐ろしさを実感するとともに、今回の土砂災害を教訓として、本校の防災体制や教育内容を見直し、平常時より災害に対する知識や心構えを子どもたちにつけることを考えたい。

今年は、本支援事業での初年度の取組であったが、廣内先生やアーカイブサポーターの皆さん、姫川砂防事務所の皆さんなどの専門的な知見を持つ講師をお迎えして、子どもたちが自分の住んでいる地域の地形の特徴を知り、防災に対する意識を高めることができた。学校全体での避難訓練や防災意識向上への取組とともに、今後も体験的な防災学習を積み重ねていき、自然災害に備えた実践的な防災への備えとなるよう取り組んでいきたい。

（文責　教頭　横山　絵里）

栄小学校における防災教育の充実に向けた取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

栄村立栄小学校

1　はじめに

栄小学校は、千曲川と山々に囲まれた自然環境の中に立地する長野県最北端にある小学校である。冬に学校は雪に囲まれ、２ｍを超える積雪があり、校庭の雲梯やブランコが雪で埋もれてしまうほどである。

今年度は、43 名の児童が、「ふるさとを愛し、心豊かに、かしこく、たくましい子」を学校目標に、学校生活を送っている。

本校は、13 年前の東日本大震災の翌日に起きた、長野県北部地震を経験した学校であり、日頃から防災意識を高め、自分の身は自分で守ろうとする力を育てることをめざしている。

2　栄村立栄小学校の防災体制について（概要）

(1) 第１回避難訓練　４月 14 日（金）２校時に実施

ア　ねらい　年度当初にあたり、災害（火災）発生時における基本的な避難の仕方や態度を身につける。

イ　指導内容　(ｱ) 雪のある時・ない時の避難経路の確認
(ｲ) 緊急放送が聞こえた場合の対応
(ｳ) 火事や煙の恐ろしさについて
(ｴ) 避難の仕方の確認
(ｵ) 「お（おさない）は（はしらない）し（しゃべらない）も（もどらない）」の確認

(2) 保小中合同引渡し訓練　７月７日（金）下校時に実施

ア　ねらい　(ｱ) 非常時に、安全かつ確実に児童の引渡しをできるようにする。
(ｲ) 緊急連絡網「オクレンジャー」が機能することの確認を行う。

イ　指導内容　(ｱ) 引渡しの連絡
(ｲ) 引渡し場所への移動
(ｳ) 引渡し場所での待ち方
(ｴ) 引渡しの方法
(ｵ) 保育園や中学校との連絡、連携

(3) 第２回避難訓練　９月１日（金）休み時間に実施

ア　ねらい　　休み時間、地震が起きた際に、身を守る方法や避難の仕方を知る。

イ　指導内容　(ｱ) 合い言葉の確認・放送の聞き方・避難の仕方

(ｲ) 緊急地震速報による避難

(ｳ) 避難場所の確認

ウ　その他　　(ｱ) 行方不明者ありの設定で訓練

(ｲ) 職員の全係活動実施

(4) シェイクアウト訓練　９月７日（木）休み時間に実施

ア　ねらい　緊急地震速報が流れた際、その場にあった自分の身を守る行動がとれるようにする。

イ　指導内容　(ｱ) 緊急地震速報が流れた瞬間に、自分の身を守る行動の確認

(ｲ) 教室以外の場所における安全な場所の確認

(ｳ) 基本は「低く、頭を守り、動かない」

(ｴ) 避難時には防災頭巾を着用する

ウ　その他　　(ｱ) 行方不明者ありの設定で訓練

(ｲ) 職員の全係活動実施

(5) 第３回避難訓練　１月 10 日（水）２時間目に実施

ア　ねらい　　積雪時における避難方法や避難場所を知る。

イ　指導内容　(ｱ) 雪があるときの避難経路・避難場所の確認

(ｲ) 合い言葉の確認・放送の聞き方・避難の仕方

ウ　その他　　二次避難場所（北信保育園）への移動

(6) 長野県北部地震の話　３月 12 日（火）朝の時間に実施

ア　ねらい　　長野県北部地震経験者から震災の話を聞く。

イ　指導内容　(ｱ) 震災当時の状況

(ｲ) 震災後の村づくり

３　学校防災アドバイザーの関わり

(1) 本校の課題として、過去の震災の記憶が曖昧になり、危機意識が薄れている。「まさか来るとは…」ではなく、「やはり来たか…」の意識で災害への心構えをどう育てていくかを考えたい。地震時の避難訓練の工夫等についてアドバイスをいただきたいと考えた。

(2) 保小中合同引渡し訓練のアドバイス

・予定していた待機場所が日なただったため熱中症予防のために場所を変えたことは、臨機応変な対応でよかった。

・待機中にどんなことをして児童を待たせるのか考えておく必要がある。

・引渡しは上の学年の児童から引渡したい。保護者の児童管理がしやすい。

・職員の人手が割けない状況も考えられる。駐車場の案内、校内経路など矢印で表示するとよい。
・地震で水槽などが倒れることも考えられる。校内の安全な動線を考えておきたい。
・保育園に行くときに、車中に子どもを残していく保護者がいた。子どもの保護のため連れていくように指導したい。
・引渡しには誰が来るのか、事前に保護者に聞いておき、リストをつくっておきたい。

(3) シェイクアウト訓練のアドバイス
・放送の後、子どもたちはしっかりと身を守る姿勢をとっていた。
・避難の時、高学年が低学年の面倒を見て避難することが自然にできていてよい。
・残存児童を発見した後、「誰か手を貸してください」と声を掛け、協力者を呼んでいたのはよかった。
・職員が校舎内に戻って避難確認をしていたが、避難をさせながら声を掛けて残存児童の確認をしたい。（「校舎の中に戻らない」）
・不明児童の捜索の際、情報の共有をどうするか。（発見の有無、発見場所、ケガの有無などの状況）
・残存児童の確認の時の手順や方法をマニュアル化するとよい。（戸を開けて目視、トイレ等死角の確認、見終わった場所はチョークで〇をするなど）
・どこに行ったらよいのか迷っている児童がいた。集合場所へ目印を貼っておきたい。職員が仕組みを作って、子どもが理解するようにしたい。
・特別教室からの避難については、授業の始めに避難経路や避難の方法を確認するなど、短時間で折に触れて行うとよい。

4　事業の成果及び今後の課題

今回、学校防災アドバイザーよりアドバイスをいただき、これまでの訓練の方法や内容について、検討していく必要があると感じた。児童及び職員の命をしっかりと守れるように、よりよい方法を検討し改善したい。

5　まとめ

学校防災アドバイザーに来ていただき大変意義があった。これからも外部の方に来ていただいて助言をいただきながら、学校の安全防災について考えていきたい。

（文責　教頭　市川　勝）

学校安全総合支援事業の取組について

―１村１校の強みを生かした引渡し訓練―

栄村立栄中学校

1　はじめに

栄村は長野県最北端に位置する人口 1,605 人（令和５年 11 月現在）、高齢化率 54.2%の村である。村に大きな企業はなく、子育て世代の保護者は村内の公共施設、または隣接する津南町や飯山市に通勤している。

村には栄中学校、栄小学校、北信保育園がある。中学校は村の北端に位置し、北信保育園、栄小学校は村の南端に位置している。

栄村は今から 12 年前の 2011 年（平成 23 年）３月 12 日未明に最大震度６強に見舞われ、大きな被害を被った。

2　長野県学校安全総合支援事業を活用した取組

(1) 令和４年度の実施内容

栄中学校は令和４年度から長野県の学校安全総合支援事業に参加しており、信州大学教育学部特任教授榊原保志先生にご指導いただいている。

令和４年度は、以下の６点について重点的に取り組み一定の成果を修めた。

ア　未整備だった栄村スクールバス運行マニュアルの作成

イ　学校だよりをツールとした家庭と両輪で行う防災教育

ウ　村と連携した避難所開設を想定した校舎利用レイアウトと避難所ルール作成

エ　専門家と共に行う校内の危険箇所点検

オ　長野県北部地震を風化させない災害に強い村づくりのための防災教育

カ　形骸化されつつある避難訓練の見直し

(2) 令和５年度の実施内容

昨年度、榊原先生から例年９月に行われている引渡し訓練について「栄村には保育園が１つ、小中学校が１つしかないので、より有事に対応できるよう、保育園、小中学校と同一日、同一のタイミングで引渡し訓練を行ったらどうか」とご提案いただいた。

そこで、令和５年度は保育園、小学校、村教育委員会と連携し、同一日、同一のタイミングで引渡し訓練を行うことにした。

ア　実施前の準備・留意点

(ｱ) 年間計画に予め引渡し訓練の日を位置づけ保護者に周知した。

(ｲ) それぞれの学校、園でバラバラまたは明確に定まっていなかった保護者へ引き渡す場合の条件を統一した。

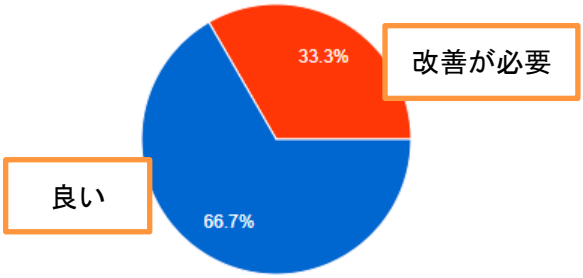
(ｳ) 実施日１ヶ月前を目処に保護者通知を出した。

(ｴ) 保護者の勤務している場所、各家庭の事情も考慮し、保育園、小学校、中学校どの順番で迎えに来ても良いこととする。

イ　実施後　Google フォームを活用し、より有事に活用出来る引渡しにするために保護者にアンケートを取り考察をした。

〈アンケート結果〉

(ｱ) 期日について



(ｲ) 「(ｱ)」で改善が必要と回答された方のご意見

〇もっと早い時期が良いのでは。

〇何月でも良いが、保育園の公開の翌日だったので連日の早帰りとなった。考慮してほしい。

〇10 月頃はどうか。暑くも寒くもない時期が良い。

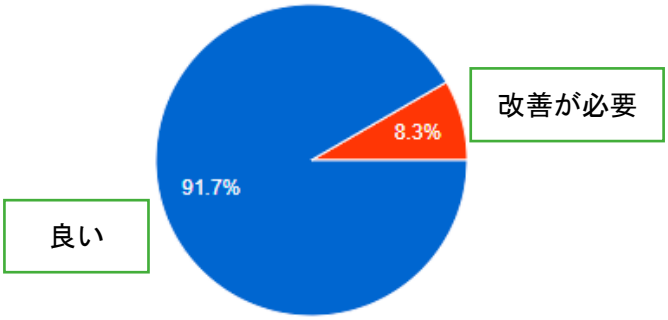
〇時期は良いが時間帯はもう少し遅い方が良い。

〇保育園・小学校・中学校の行事を考慮して実施日を決定する。

〇時間帯については、小学校の低学年の下校時刻を考慮すると開始時刻は 15:30 からが良い。

〇時期は有事を想定して、３年で１サイクルが回るよう「春・秋・冬」に行いたい。

(ｳ) 引渡しの方法について



(ｴ) 「(ｳ)」で改善が必要と回答された方のご意見

・有事の際は親ではなく、祖父母が迎えに行く場合も考えられる。
・中学校では事前に通知されていた生徒の待機場所が違った。
・小学校では担任が、学年が分かる札を持っていたが、中学校はなかった。
・駐車場の誘導係がいなかった。
・迎えに来た人を把握する意味から、引渡しカードの記入が必要なのではないか。引渡しの方法は村内統一が良い。

○引渡しの方法を村内統一としたい。
・保育園・小学校・中学校共に担任が、クラスがわかる札を持って子どもの先頭に立っている。
・駐車場の誘導係を配置する。
・保育園・小学校・中学校全てで引渡しカードを使用する。
・夏休み明けに保育園・小学校・中学校共通の「引渡しの方法」を各家庭に配付する。来年度以降は、４月初旬に家庭配付する。
※その日の天候や被害状況等によって園児・児童・生徒の待機場所は変更する可能性がある。誘導する職員をつける、または矢印などで表示をし、迎えに来られた方が混乱しないよう配慮する。

(ｵ) その他　ご意見等

・ 同一日の訓練を行い、良かった。
・ 兄弟がいる家庭は同時進行という流れの訓練も大事だと思う。
・ 兄弟がいる家庭について
①上の学年から迎えに行く。
②兄弟をまとめておく方法もある。

○有事の際、学年ごとに人数把握をしているので、兄弟姉妹をまとめることはせず、学年ごと保護者に引き渡す。
○兄弟がいるご家庭については上の学年の園児・児童・生徒から順番に引き渡す。

・考察をもとに引渡し候補者リストを作成することにし、作成の目的と依頼のために保護者文書を作成、配付した。
・アンケート結果、榊原先生のご指導をもとに保育園、小中学校共通の引渡し訓練の手順・留意事項を作成した。

3　おわりに

今年度、初めて保育園と小中合同の引渡し訓練を行った。実施後アンケートでは保護者目線での改善点が多く出された。

指摘された改善点を修正して、「令和５年　北信保育園　栄小学校　栄中学校共通　有事発生時の引渡し手順・留意事項」を作成することができた。来年度も事前に時期を検討し、合同引渡し訓練を行いたい。また、実施後は保護者にアンケートを依頼し、さらに有事に活用出来る引渡しの方法をブラッシュアップしたい。

（文責　教頭　千野　美奈）